広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XX 2008. 3. 22

特別支援教育における音楽指導を支える文献の現状

－「Webcat Plus」に収録された図書の分析をとおして－

藤 原 志 帆
（大分大学教育福祉科学部）

はじめに

筆者は、知的障害養護学校における音楽科教育に関する研究[1]を進める中で、特別支援教育における音楽科教育の体系化を阻む要因の一つとして、音楽実践の継承が円滑に行われていないことが挙げられると考えるようになった。

そこで、特別支援教育における音楽実践の継承について検討するための第一歩として、2006年11月に「教材研究を支える文献に関する質問紙調査」[2]を行った。

調査の対象は、ある地方の音楽教育に関する研究大会に参加した特別支援教育に携わる先生方である。先生方が、これまでに蓄積された実践をどのように受け継いでいるのかを把握するために、教材研究における使用文献、障害児の音楽指導に関する文献の認識などについて尋ねた。

調査の結果、教材研究の際に既存の文献があまり介在しておらず、そのような状況の中でも、幼児教育やその他の楽曲集から教材を選び[3]、特別支援教育や幼児教育の音楽指導に関する文献を参考にして授業づくりが行われていることが推察された。文部科学省著作の特別支援学校用教科書や教科書解説はあまり使用されていなかった。また、先生方は、障害児の音楽指導に関する文献がじゅうぶんに発行されているとは認識しておらず、今後、新たな楽曲集や実践事例集などの発行を望んでいることが推察された。

上記の調査では、障害児の音楽指導についてどのような文献が存在しているのかを明らかにしていない。そこで本調査では、現在発行されている障害児の音楽実践に関する図書について分析し、特別支援教育における音楽指導を支える文献の現状について考察する。

1．分析の対象および方法

本稿では、特別支援教育における音楽指導を支える文献として、先生方が教材研究の際に利用しやすいと考えられる図書に焦点を当てた。

まず、国立情報学研究所のデータベース「Webcat Plus」（本・雑誌の検索データベース：2007年７月）から、表１に示している９つの検索語により、障害児の音楽実践に関わるとみられる文献171件を抽出した（表１のＡ）。次に、上記171件の文献リストから、ビデオ、試験対策本、目録、重複文献などを除外した。さらに、リストに残った文献を閲覧し、障害児の音楽実践に関する記述がみられない文献を除外した（表１のＢ）。その結果、本調査における分析の対象となった文献は、119件[4]である（表１のＣ）。

これらの文献について、（１）分野、（２）対象、（３）内容、（４）構成、の４つの観点から分析した。なお、119件には、文部科学省著作の特別支援学校用教科書や教科書解説（以下「著作教科書など」と記す。）が21件[5]含まれていた。これらが、教科書や教科書解説という特別な性格を有する文献であることから、「著作教科書など」を除いた文献についての分析も加えた。

表１　検索語ごとの文献数

検索語	A:抽出文献	B:除外文献	C：分析文献
①「障害児」AND「音楽」	１０２	２８	７４
②「特別支援学校」AND「音楽」	１	１	０
③「養護学校」AND「音楽」	４１	１０	３１
④「盲学校」AND「音楽」	５	０	５
⑤「聾（ろう）学校」AND「音楽」	５	３	２
⑥「特別支援学級」AND「音楽」	０	０	０
⑦「特殊学級」AND「音楽」	６	５	１
⑧「特別支援教育」AND「音楽」	７	２	５
⑨「特殊教育」AND「音楽」	４	３	１
計	１７１	５２	１１９

２．調査の結果

（１）文献の分野

文献は、表２に示す①から⑧の分野に分類された。「①障害児の音楽教育」と「②障害児の音楽療法」は、文献全体において障害児の音楽実践を取り扱ったものである。「③特別支援教育」から「⑧その他」は、文献の一部において障害児の音楽実践を取り扱っている。「⑧その他」には、心理、アートセラピーなどに関するものが含まれている。

文献全体（表２のＡ）では、「①障害児の音楽教育」に関するもの（46件：38.7%）が４割弱を占めてた。続いて「③特別支援教育」に関する文献の一部において、障害児の音楽実践を取り扱ったもの（27件：22.7%）が多くなっている。

「著作教科書など」21件が「①障害児の音楽教育」に関するものであったため、「著作教科書など」以外の文献（表２のＢ）では上記と順位が逆転した。「③特別支援教育」に関する文献の一部において障害児の音楽実践を取り扱ったもの（27件：27.6%）が最も多くなり、続いて「①障害児の音楽教育」に関するもの（25件：25.5%）が多くなっている。

表２　分野別の文献数

文献の分野	A：文献全体	B：「著作教科書など」以外の文献
①障害児の音楽教育	４６	２５
②障害児の音楽療法	１７	１７
③特別支援教育	２７	２７
④音楽教育	８	８
⑤音楽療法	１０	１０
⑥学校教育	２	２
⑦福祉	５	５
⑧その他	４	４
計	１１９	９８

（２）文献の対象

文献は、表３に示す①から⑩の対象に分類された。「①障害一般」には、文献に「障害一般」と記されたもの、複数の障害を対象としたものを分類した。「③知的障害」、「④自閉症」、「⑤ＬＤ」、「⑥ＡＤＨＤ」は発達障害に含まれるが、本稿では、文献に記された対象の障害名にもとづき、「発達障害」と記されて

いるものを「②発達障害」に、「知的障害」と記されているものを「③知的障害」に分類した（④から⑥も同様)。「⑩その他」には、健常児と障害児の両者を対象としたものが含まれている。

文献全体（表３のＡ）では、「①障害一般」を対象としたもの（59件：49.6%）が半数近くを占めた。続いて「③知的障害」を対象としたもの（38件：31.9%）が多くなっている。

「著作教科書など」21件のうち19件が「知的障害」を対象としたもの、２件が「聴覚障害」を対象としたものであった。そのため、「著作教科書など」以外の文献（表２のＢ）では、「①障害一般」を対象としたもの（59件：60.2%）が６割を占めた。続いて、「③知的障害」を対象としたもの（19件：19.4%）が多くなっている。

表３　対象別の文献数

文献の対象	Ａ：文献全体	Ｂ:「著作教科書など」以外の文献
①障害一般	５９	５９
②発達障害	３	３
③知的障害	３８	１９
④自閉症	４	４
⑤ＬＤ	１	１
⑥ADHD	１	１
⑦視覚障害	４	４
⑧聴覚障害	６	４
⑨病弱	１	１
⑩その他	２	２
計	１１９	９８

（３）文献の内容

文献は、表４に示す①から⑥の内容に分類された。「⑥その他」には、音楽療法と音楽教育の両者を取り扱ったものが含まれている。

文献全体（表４のＡ）では、「①学校での音楽指導」に関するもの（53件：44.5%）が４割強を占めた。続いて「③音楽療法」に関するもの（34件：28.6%）が多くなっている。

「著作教科書など」21件が「①学校での音楽指導」に関するものであったため、「著作教科書など」以外の文献（表４のＢ）では上記と順位が逆転した。「②音楽療法」に関するもの（34件：34.7%）が最も多くなり、続いて「①学校での音楽指導」に関するもの（32件：32.7%）が多くなっている。

表４　内容別の文献数

文献の内容	Ａ：文献全体	Ｂ：「著作教科書など」以外の文献
①学校での音楽指導	５３	３２
②学校での他の指導	１３	１３
③音楽療法	３４	３４
④音楽活動	９	９
⑤発達支援	７	７
⑥その他	３	３
計	１１９	９８

（4）文献の構成

文献は、表5に示す①から⑫の構成に分類された。「⑫その他」は文献紹介である。

文献全体（表5のA）では、「⑥理論＋事例」（32件：26.9%）が最も多く、「④事例」（23件：19.3%）、「⑧理論＋楽曲＋展開例」（22件：18.5%）という構成のものが続いた。

「著作教科書など」21件のうち、11件が「⑧理論＋楽曲＋展開例」、10件が「②楽曲」という構成であった。そのため、「著作教科書など」以外の文献（表5のB）では、「⑥理論＋事例」（32件：32.7%）が最も多く、「④事例」（23件：23.5%）、「①理論」（13件：13.3%）という構成のものが続いた。

表5　構成別の文献数①

文献の構成	A：文献全体	B：「著作教科書など」以外の文献
①理論	13	13
②楽曲	12	2
③展開例	5	5
④事例	23	23
⑤理論＋展開例	3	3
⑥理論＋事例	32	32
⑦楽曲＋展開例	1	1
⑧理論＋楽曲＋展開例	22	11
⑨理論＋展開例＋事例	1	1
⑩楽曲＋展開例＋事例	2	2
⑪理論＋楽曲＋展開例＋事例	4	4
⑫その他	1	1
計	119	98

さらに、文献を「①理論を含むもの」、「②楽曲を含むもの」、「③展開例を含むもの」、「④事例を含むもの」の4つの構成に分類し、分析を加えた（表6）。

文献全体（表6のA）でも、「著作教科書など」以外の文献（表6のB）でも、「①理論を含むもの」や「④事例を含むもの」が、全体の半数以上を占めた。

「著作教科書など」21件は「②楽曲を含むもの」であった。そのため、「②楽曲を含むもの」は、文献全体では41件（34.5%）であったが、「著作教科書など」以外の文献では20件（20.4%）になり、大きく減少した。

表6　構成別の文献数②[6)]

文献の種類	A：文献全体	B：「著作教科書など」以外の文献
①「理論」を含むもの	75	64
②「楽曲」を含むもの	41	20
③「展開例」を含むもの	38	27
④「事例」を含むもの	62	62

3．考察

分析の結果、対象となった文献（A：文献全体）について、以下の特徴が明らかになった。

①分野・・・主として「障害児の音楽教育」に関するもの（4割弱）である。
②対象・・・主として「障害一般」を対象としたもの（半数近く）であるが、「知的障害」を対象としたものも3割以上含まれている。
③内容・・・主として「学校での音楽指導」に関するもの（4割強）である。
④構成・・・主として「理論」や「事例」を含むものであるが、「楽曲」や「展開例」を含むものも3割以上は含まれており、「理論＋楽曲＋展開例」という構成もみられる。

「①分野」や「③内容」の特徴をみると、対象となった文献が、学校における障害児の音楽指導にある程度は焦点を当てたものになっていることがわかる。また、「②対象」や「④構成」の特徴をみると、障害種別の文献や、「楽曲」や「展開例」を含んだ構成の文献もある程度は発行されていることがわかる。これらのことから、現在発行されている障害児の音楽指導に関する図書が、特別支援教育における音楽指導をある程度は支えることができていると考えられる。

しかし、この結果には「著作教科書など」が大きく関与している。「著作教科書など」は、すべてが、学校における障害児の音楽指導に焦点を当てたものであり、特定の障害を対象として、「楽曲」を含む構成のものであった。分析の対象となった文献から「著作教科書など」をのぞくと、文献（B：「著作教科書など」以外）の特徴は以下のようになった。

①分野・・・「特別支援教育」の一部で取り扱ったもの、「障害児の音楽教育」に関するものが多い。
②対象・・・主として「障害一般」を対象としたもの（6割）である。
③内容・・・「音楽療法」、「学校での音楽指導」に関するものが多い。
④構成・・・主として「理論」や「事例」を含むものである。「楽曲」を含むものが大きく減少している（＊「A：文献全体」と比較して）。

「①分野」や「③内容」の特徴をみると、対象となった文献が、学校における障害児の音楽指導に焦点を当てたものになっているとは言い難い。また、「②対象」や「④構成」の特徴をみると、障害種別の文献が減少し、「楽曲」を含んだ構成の文献が大きく減少している（＊「A：文献全体」と比較して）。これらのことから、「著作教科書など」をのぞくと、障害児の音楽指導に関する図書が、特別支援教育の音楽指導を支えることができるほど発行されているとは言い難い。

「著作教科書など」が、特別支援教育における音楽指導に携わる先生方にあまり活用されていないという傾向[7]を考慮すると、前述した筆者の調査（2006年11月実施）において、先生方が障害児の音楽指導に関する文献がじゅうぶんに発行されているとは認識していないという結果が出たことが理解できる。

特別支援教育の推進により、今後、学校における障害児の音楽指導に焦点を当てた文献はますます必要になるであろう。障害種ごとの文献がもう少し発行されれば、個々の実態に即した音楽指導の実現が可能になると考えられる。また、楽曲が子どもの実態に合わせてどのように選択され（アレンジされ）、どのような音楽活動に結びついていくのかを、展開例も含めて示した文献がもう少し発行されれば、特別支援教育における音楽実践の継承を促すことができると考えられる。

おわりに

本稿では、「Webcat　Plus」に収録された障害児の音楽実践に関する図書を、（1）分野、（2）対象、（3）内容、（4）構成、の観点から分析し、特別支援教育における音楽指導を支える文献の現状について考察した。

現在発行されている障害児の音楽指導に関する図書は、全体を上記の4観点から分析すると、特別支援

教育における音楽指導をある程度は支えることができるものになっていると推察された。しかし、これらから文部科学省著作の特別支援教育用教科書や教科書解説をのぞくと、現在、障害児の音楽指導に関する図書が、特別支援教育における音楽指導を支えることができるほど発行されているとは言い難い状況であった。

今後は、本稿で分析した図書について、特別支援教育の音楽指導に携わる先生方が、どの程度認知しており、どの程度活用しているのかを調査する予定である。そして、特別支援教育における音楽実践の継承を促すことができるような文献の発行やシステムの開発について検討したいと考えている。

注

1）藤原志帆（2005）「知的障害養護学校における音楽科教育成立史研究」広島大学大学院教育学研究科学位論文（未公刊）．ほか。

2）詳細は、藤原志帆（2006）「障害児の音楽指導に関する文献の現状」『教育学研究紀要』52巻，pp.426－431.を参照。

3）例えば、知的障害児を対象とした音楽指導の場合、①特別支援学校の教科書（文部科学省の著作教科書）、②小・中学校の教科書（文部科学省の検定教科書）、③その他の教科用図書（学校教育法第107条）、の3種類をもとに教材を選び、教材研究を進めていくことになる。

4）向山洋一監修（2007）『教材・教具の選び方のチェックポイント』明治図書．ほか。本稿の最後に、分析の対象となった文献の一部を構成別に示している。

5）特別支援教育の音楽科に関する文部科学省著作文献は、現在、聴覚障害者用の教科書が1種6点（小学部用）、知的障害者用の教科書が1種4点（小学部用3点・中学部用1点）、知的障害者用の教科書解説が1種2点（小学部用1点・中学部用1点）発行されている。聴覚障害者用の教科書は、1963年に初めて発行され、現在までに1回改訂されている。知的障害者用の教科書は、1964年に初めて発行され、現在までに3回改訂されている。知的障害者用の教科書解説は、1965年に初めて発行され、現在までに3回改訂されている。

分析の対象となった文献には、聴覚障害者用教科書2件、知的障害者用教科書8件、知的障害者用教科書解説11件の、計21件が含まれていた。これらは、これまでに発行された文部科学省著作文献のすべてを網羅してはいない。

6）「①理論を含むもの」には、表5の「①理論」、「⑤理論＋展開例」、「⑥理論＋事例」、「⑧理論＋楽曲＋展開例」、「⑨理論＋展開例＋事例」、「⑪理論＋楽曲＋展開例＋事例」を分類した。「②楽曲を含むもの」から「④事例を含むもの」についても、同じ手順で分類した。そのため、「A：文献全体」の計は119を超え、「B：著作以外の文献」の計も98を超えている。

7）注2）に示した筆者の調査において、特別支援教育における音楽指導に携わっている先生方が、教材研究の際に「著作教科書など」をあまり活用していないという傾向が確認されている。斉藤加代子（1996）「精神薄弱養護学校「音楽」教科書使用の現状と課題」『埼玉県立南教育センター研究紀要』第9巻、pp.60－63. および 斉藤一雄（2005）「養護学校音楽科教科書の活用調査」『発達障害研究』第27巻第2号、pp.147－152.においても、同様の傾向が指摘されている。

斉藤一雄・星名信昭（1996）「養護学校小学部用音楽科教科書の教材分析」『上越教育大学障害児教育実践センター紀要』2、pp.29－36. では、著作教科書掲載教材の分析から教科書の有用性が示されており、斉藤一雄（2005）「養護学校音楽科教科書の活用調査」『発達障害研究』第27巻第2号、pp.147－152. では、教科書解説を併用した著作教科書の使用や、著作教科書掲載教材を用いた実践の検討を促すなどして、著作教科書の活用方法を再検討する必要があると述べられている。

主要参考文献

- 竹林地毅編（2006）『障害のある子どものための表現活動 個別の指導計画による身体表現・ダンス・音楽』東洋館出版社.
- 生野里花・二俣泉編（2002）『音楽療法のためのオリジナル曲集　静かな森の大きな木』春秋社.
- 加藤博之（2005）『子どもの豊かな世界と音楽療法 障害児の遊び＆コミュニケーション』明治図書.
- 文部省（2000）『盲学校, 聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領（平成11年3月）解説－各教科, 道徳及び特別活動編－』 東洋館出版社.
- 文部科学省（2002）『おんがく☆おんがく☆☆おんがく☆☆☆教科書解説』 東京書籍.
- 文部科学省（2002）『音楽☆☆☆☆教科書解説』 東京書籍.
- 日本学校音楽教育実践学会編（2002）『障害児の音楽表現を育てる』音楽之友社.
- 斉藤加代子（1996）「精神薄弱養護学校「音楽」教科書使用の現状と課題」『埼玉県立南教育センター研究紀要』第 9 巻、pp.60－63.
- 斉藤一雄・星名信昭（1996）「養護学校小学部用音楽科教科書の教材分析」『上越教育大学障害児教育実践センター紀要』 2 、pp.29－36.
- 斉藤一雄（2005）「養護学校音楽科教科書の活用調査」『発達障害研究』第27巻第 2 号、pp.147－152.
- 遠山文吉（2005）『知的障害のある子どもへの音楽療法－子どもを生き生きさせる音楽の力－』明治図書.
- 全国知的障害養護学校長会編著（2007）『特別支援教育の未来を拓く指導事例Navi知的障害教育Ⅰ小学部編』ジアーズ教育新社.

付記：本稿は、平成19年度科学研究費補助金（若手研究Ｂ：課題番号19730543）の助成を受けた研究の一部である。

資料　構成別の文献例

文献の構成	文献名
①理論	宇佐川浩（2007）『感覚と運動の高次化による発達支援の実際』学苑社.
②楽曲	文部科学省（2006）『おんがく☆』東京書籍. 大江光（1993）『大江光の音楽：フルート・ピアノ作品集』全音楽譜出版社.
③展開例	森哲弥（2001）『障害児の遊びと手仕事：遊具・教具のつくりかた』黎明書房.
④事例	成田文忠（2005）『僕もピアノが弾けたよ：知的障害をもつ仲間と奏でる音色』とびら社.
⑤理論＋展開例	イレーネ・ストリータ（2005）『子どもとつくる音楽：発達支援の音楽療法入門』（稲田雅美・石原興子訳），かもがわ出版.
⑥理論＋事例	土野研治（2006）『声・身体・コミュニケーション：障害児の音楽療法』春秋社.
⑦楽曲＋展開例	滋賀県立北大津養護学校うたリズム音楽グループ編著（2000）『わくわく音楽らんど：あおぞらにひびけぼくらの足音』星雲社.
⑧理論＋楽曲＋展開例	文部省（1996）『音楽☆☆☆☆指導書』東京書籍. 伊藤嘉子・小川英彦（2007）『障害児をはぐくむ楽しい保育：子どもの理解と音楽あそび』黎明書房.
⑨理論＋展開例＋事例	赤星建彦ほか（1999）『高齢者・知的障害児のための療育音楽のすすめ』一橋出版.
⑩楽曲＋展開例＋事例	山田俊之（2000）『ボディ・パーカッション入門：体を使った楽しいリズム表現』音楽之友社.
⑪理論＋楽曲＋展開例＋事例	細川速見・和田幸子（2006）『音楽あそび：障害児と共に育ち合う』三学出版.
⑫その他	阿倍秀雄編（1990）『「自閉」の本九十九冊』学苑社.

（＊「著作教科書など」とそれ以外の図書から、構成別に年代の新しい文献を1冊ずつ示している。）